

災害アーカイブ展トークイベントを契機 とした被災者の振り返りに関する考察

坂井華海¹・矢ヶ井那津¹・田中尚人²・竹内裕希子²

A Study on the Reflection of Disaster Survivors on the Occasion of Disaster Archive Exhibition Talk Events

Hanami SAKAI¹, Natsu YAGAI¹, Naoto TANAKA² and Yukiko TAKEUCHI²

Abstract

In Kumamoto Prefecture, since 6 years have passed after the Kumamoto Earthquake, there are concern that the memory of the natural disaster is fading. To address this, efforts to pass on the experience and memories of the survivors are being planned. Local governments and research institutions such as universities are spearheading this initiative. What has changed is the opportunities for victims to talk about their experience and pass on their personal stories. This study focus on narrative, a method of passing on memory, and examines the impact of a disaster archive exhibition, combined with a talk event, and a panel exhibition of university-owned disaster-related materials and research results. Disaster victims had the opportunity to tell their stories related to the event, before their memories fade, since 7 years have passed since the event. The results of this study showed that the exhibition of such disaster archives have a significant impact on the opportunities to talk to disaster victims. The results reveal that the disaster archive exhibition provided a perspective on the disaster as a whole and an opportunity to uncover new stories about the survivor's experience.

キーワード：熊本地震，記憶の継承，災害アーカイブ展，トークイベント

Key words: 2016 Kumamoto Earthquake, Transmission of memory, Disaster Archive Exhibition, Talk Event

¹ 熊本大学大学院自然科学教育部
Graduate School of Science and Technology, Kumamoto
University

² 熊本大学大学院先端科学研究部
Faculty of Advanced Science and Technology, Kumamoto
University

本稿に対する討議は 2025 年 8 月末日まで受け付ける。

1. はじめに

1.1 研究背景

平成28年熊本地震（以下、熊本地震）は、平成28（2016）年4月14日に熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード6.5の地震および4月16日に発生したマグニチュード7.3の地震をはじめとする地震活動のことを指す¹⁾。これらの地震活動によって、熊本県では、直接死50名、震災関連死・大雨による二次災害死223名、負傷者2,739名、建物被害数198,655棟の被害が報告されている²⁾。

熊本地震の発災から6年が経過した2022年4月には仮設住宅入居者が「初めて100人を切った」と報じられ、2023年3月には仮設住宅入居者はゼロになった³⁾。地元新聞社が住宅被害を受けた被災者に対して実施した調査によると5割の人が「風化を感じる」と回答⁴⁾、また国指定文化財である熊本城が壊滅的な被害を受けた熊本市における市民アンケートの調査結果では6割を超える人が「忘れがち」と回答⁵⁾しており、熊本地震の記憶の風化は、復旧や復興に伴い進んでいると言える。

これら熊本地震の経験や記憶にまつわる記録のアーカイブの作成は、様々なセクターで取り組まれている。熊本県では、発災4ヶ月以降の復旧・復興の取組として、「熊本地震の教訓を踏まえた『災害に強い熊本』を次の世代に引き継ぐ」という基本的な考え方に基づいて「熊本地震の記録・記憶の継承」に向けた、地震対応の検証やデジタルアーカイブ、震災ミュージアムの整備に取り組んでいる⁶⁾。熊本大学では、発災後、くまもと水循環・減災研究教育センター内にデジタルアーカイブ室が発足し、主に熊本大学工学部の教員が調査のために記録した写真等をデジタルアーカイブとして公開する等の活動に取り組んでいる。

1.2 研究目的

災害の記録については、2011年5月10日に東日本大震災復興構想会議で決定された「復興構想7原則」に「大震災の記録を永遠に残し、広く学術関係者により科学的に分析し、その教訓を次世代に伝承し、国内外に発信する」⁷⁾と示されている通り、その重要性が認識されている。しかし、災

害の記録に対する関心も時間の経過とともに薄れる傾向にある⁸⁾。また、災害の記録の収集や管理を担うことが可能な人材は限られているだけでなく、維持管理のための費用は安価ではないため、東日本大震災に関する災害アーカイブは、相次いで閉鎖している現状がある⁸⁾。柴山・北村他（2018）によれば、自治体による災害アーカイブの構築について、構築を終了した自治体では、収集資料の数が著しく減少しており、構築中と構築事業終了後では自治体における資料収集に対する積極性に变化が見られることが示されている⁹⁾。他方、災害対応の経験を継承する手段として、災害経験者の語りに注目し、インタビュー調査を通じて1995年の阪神・淡路大震災から10年を記念して出版された『阪神・淡路大震災10年翔べフェニックス』¹⁰⁾がある。災害経験を語ることの意味と効果について検証している佐藤（2021）は、宮城県庁職員を対象に行われた「災害の語り」の定性的検証と定量的検証のための実験結果を示している。佐藤（2021）は、宮城県庁職員の震災前と震災直後の行動から物語形式の有効性や継続的な語り合いの重要性を述べ、媒体による記憶量の変化を比較し、本人による生語りが弟子による語りや映像などに比べると時間が経過した後も参加者の記憶に残っていることを示した¹¹⁾。また、東日本大震災被災者の心理的回復過程について、7年間の心理的变化を半構成的面接法による語りから分析している酒井・渥美（2019）では、1年目、4年目、7年目、それぞれに心理的变化ラインの変化に特徴が認められることと、心理的变化に潜在する影響要因には、避難所や仮設住宅への入退去時期、個々の生きがい、本人または家族の健康状態等が影響すると述べている¹²⁾。時間が経過することで心理的变化が認められることは、災害継承で語られる内容にも変化が存在することが類推される。小規模でもアーカイブ資料を残したり、展示することで、災害経験を振り返る機会となり発災直後には語られなかったことが語られると考えられる。

本研究の目的は、記憶の継承の手法の一つである語りに着目し、発災から7年が経過し記憶の風化が懸念されている熊本地震の被災地域において、

大学が所有する災害に関する資料や研究成果のパネル展示とトークイベントを併せたアーカイブ展「熊本大学デジタルアーカイブ室 (TERADA) × 熊本地震 記録の回廊 災害アーカイブ展 (以下、災害アーカイブ展)」のトークイベントやパネル展示の存在が被災者に対して語る機会や語りの内容に与えた影響を考察することである。

1.3 熊本大学デジタルアーカイブ室 (TERADA)

熊本大学デジタルアーカイブ室 (以下、熊大デジタルアーカイブ室) は、平成28年熊本地震を機に発足した。2011年に発生した東日本大震災のアーカイブについて多くの知見と技術を有する東北大学から技術支援を受け、デジタルアーカイブ「ひのくに災史録 (写真1)」を構築、2023年1月時点で11,146件の画像データを公開している小規模のデジタルアーカイブである。2019年に熊大デジタルアーカイブ室が熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センターに移設した際に、活用について議論し実施する TERADA (テラダ) = Team of Education and Research According Digital Archive を設置した。TERADA は、熊本大学の前身である旧制第五高等学校の卒業生で物理学者であった寺田寅彦にあやかっており、TERADA は以下の3つを活動方針としている¹³⁾。

1. データと人をつなぐ
2. できたこと、できなかったことをつなぐ
3. 現場と教育をつなぐ

「1. データと人をつなぐ」は、「ひのくに災史録」やデジタルアーカイブの認知向上と活用増進を目的としている。具体的な取り組みとして、熊本大学内で建物被害を受け、建て替えや修復が行われたことによって現在はその傷跡が見えなくなった施設などに看板 (写真2) を設置し、当時の状況を伝え、看板に記された QR コードから「ひのくに災史録」につないでいる。

「2. できたこと、できなかったことをつなぐ」は、震災直後から復旧・復興への変遷に関わるデータや熊本におけるこれまでの災害に関するデータを収集し、データ構築のあり方を検討している。

熊本大学アーカイブ「ひのくに災史録」

平成28年熊本地震において得られた知見データ等の情報をアーカイブとして蓄積し、今後の復旧支援や防災教育等に活用します
— 平成28年熊本地震の概要 —



熊橋 轟橋 石垣 住宅 樹木 段面 柱 庭木 破損 熊本城 築 熊本大学
外観 鳥製 落下 内観 国指定重要文化財 屋根瓦 傾斜 城内樹木

写真1 「ひのくに災史録」



写真2 地震後建て替えられた熊本大学工学部
一号館前に設置された看板

「3. 現場と教育をつなぐ」では、教養科目でのデジタルアーカイブの活用やシンポジウム、災害アーカイブ展の実施により、熊本地震を知り、次の災害に備える機会を提供する活動に取り組んでいる。

2. アーカイブ展の概要

本章では、災害アーカイブ展の概要を示す。

2.1 パネル展示

熊大デジタルアーカイブ室による地域社会におけるアーカイブ展は、発災から6年が経過した2022年に初めて実施された。会場は、いずれも熊

本地震の被害が甚大だった地域である熊本県熊本地方である、上益城郡益城町、熊本市南区、上益城郡御船町の3箇所、通算120日間にわたり開

催された（開催期間は表1の通り）。開催場所や開催期間の設定については、熊本大学デジタルアーカイブ室の担当教員と自治体施設担当の職員

表1 熊大 TERADA×熊本地震記録の回廊 災害アーカイブ展

開催地	形式	開催期間	会場	語り手/聞き手
A. 益城町	I パネル展示	① 2022年6月1日(水) - 6月14日(火) 14日間	益城町復興まちづくりセンターにじいろ	-
		② 2022年6月15日(水) - 6月30日(木) 16日間	益城町四賢婦人記念館「みんなの家」	-
		③ 2022年7月1日(金) - 7月14日(木) 14日間	益城町交流情報館ミナテラス	-
	II トークイベント	① 2022年6月11日(土)	益城町復興まちづくりセンターにじいろ	語：中村康佑 聞：田中尚人
		② 2022年7月7日(木)	益城町交流情報館ミナテラス	語：小多崇 聞：田中尚人
		③ 2022年7月9日(土)	益城町交流情報館ミナテラス	語：堤英介 西村まみ 竹内裕希子 聞：田中尚人
B. 南区	I パネル展示	① 2022年9月2日(金) - 10月14日(金) 43日間	熊本市南区幸田公民館	-
		② 2022年10月15日(土) - 10月30日(日) 16日間	熊本市南区城南公民館	-
	II トークイベント	① 2022年9月3日(土)	熊本市南区幸田公民館	語：池田哲也 聞：竹内裕希子
		② 2022年9月15日(木)	熊本市南区幸田公民館	語：山尾敏孝 聞：田中尚人
		③ 2022年9月30日(日)	熊本市南区城南公民館	語：高濱辰也 原田健 聞：田中尚人
	C. 御船町	I パネル展示	① 2022年10月21日(土)	御船町カルチャーセンター
② 2022年10月22日(日) - 11月6日(日) 16日間			御船町街なかギャラリー	-
II トークイベント		① 2022年11月6日(日)	御船町街なかギャラリー	語：内村光宏 榊建一 聞：竹内裕希子



写真3 災害アーカイブ展パネル展示の様子
(熊本市南区)



写真4 災害アーカイブ展パネル展示の様子
(上益城郡御船町)



写真5 展示パネル

との間で調整された。

展示したパネルは、A0サイズ9枚であった。内容は、熊本地震の概要と被害状況、復旧・復興にかかる熊本大学の教員や学生の活動の様子の他、熊本県南部で発生した令和2年7月豪雨の被害状況、また、工学部土木建築学科の学生による卒業論文・修士論文の紹介であった(写真3、写真4、写真5)。災害アーカイブ展はパネル展示の他にトークイベントも開催した。

2.2 トークイベント

トークイベントは、災害アーカイブ展開催地に居住しているあるいは所縁のある熊本地震を経験した人が語り手となり、熊大デジタルアーカイブ室の教員が聞き手となって計7回実施した。聞き手は、語り手が発災時からトークイベント当日までを振り返り、熊本地震時に「やっておいて、よかった」こと「やっておけば、よかった」ことを語ることが可能になるように質問、対話により進化した。トークイベントの詳細は以下の通りである。

(1) 上益城郡益城町

第1回2022年6月11日(土)14:30-15:30

会場：益城町復興まちづくりセンター「にじいろ」

概要：熊本地震時には熊本県庁土木技術職員で、現在は益城町地域おこし協力隊の中村康佑氏を語り手に迎えた。トークイベントについては、熊大デジタルアーカイブ室の3つの活動方針「データと人をつなぐ」「できたこと、できなかったことをつなぐ」「現場と教育をつなぐ」に沿って、中村氏の熊本地震発災時の体験や心情について振り返っていただいた。聞き手は熊大デジタルアーカイブ室・田中尚人であった(写真6)。

第2回2022年7月7日(木)10:00-11:00

場所：益城町交流情報館「ミナテラス」

概要：熊本地震時は熊本日日新聞社社会部のデスクと論説委員を務め、現在は東京支社長である小多崇氏を語り手に迎え、「記憶の継承」をテーマに記者としての経験を交えながら熊本地震を振り返っていただいた。聞き手は熊大デジタルアーカイブ室・田中尚人であった。

第3回2022年7月9日(土)10:00-11:30

場所：益城町交流情報館「ミナテラス」

概要：益城町教育委員会生涯学習課係長・堤英介氏、益城町図書館司書・西村まみ氏、熊大デジタルアーカイブ室長・竹内裕希子氏を語り手に迎え、「私とアーカイブ」をテーマに、それぞれの立場でアーカイブ、熊本地震の記憶を継承することに対する思いを伺った。聞き手は熊大デジタルアーカイブ室・田中尚人であった。



写真6 トークイベントの様子(上益城郡益城町)

(2) 熊本市南区

第4回2022年9月3日(土) 15:00-17:30

場所：熊本市南区幸田まちづくりセンター

概要：幸田まちづくりセンター長(池田哲也氏)を語り手に迎え、熊大デジタルアーカイブ室の3つの活動方針である、「データと人をつなぐ」「できたこと、できなかったことをつなぐ」「現場と教育をつなぐ」に沿って、山尾氏に熊本地震当時のことについて振り返っていただいた。聞き手は熊大デジタルアーカイブ室・竹内裕希子であった。

第5回2022年9月15日(木) 15:00-16:00

場所：熊本市南区幸田まちづくりセンター

概要：熊本大学名誉教授(山尾敏孝氏)を語り手に迎え、熊本地震当時の経験を公的な立場、地域の一員としての立場、個人としての立場に沿って振り返っていただいた。聞き手は熊大デジタルアーカイブ室・田中尚人であった。

第6回2022年9月30日(日) 13:30-15:00

場所：熊本市南区火の君文化センター視聴覚室

概要：熊本地震時に熊本市南城区南公民館(火の君文化センター)で避難所運営を担当した熊本市職員高濱辰也氏、原田健氏を語り手に迎え、震災時に「やっておけば良かった」と思ったこと、「やっておいて良かった」と思ったこと等を中心に避難所運営の経験について振り返っていただいた。聞き手は熊大デジタルアーカイブ室・田中尚人が聞き手であった。

(3) 上益城郡御船町

第7回2022年11月6日(日) 10:00-11:15

場所：御船町街なかギャラリー

概要：熊本地震当時御船町消防団長だった内村光宏氏と副団長の榊建一氏を語り手に迎え、発災時に取り組んだことや困ったことを中心に振り返っていただき、現在取り組んでいることや今後取り組みたいと考えていることについても伺った。会の冒頭「いやーもう忘れちゃったよ」という榊氏は、淡々と当時を振り返る内村氏の話に相槌を打ちながら、次第に自らの経験について振り返っていった。聞き手は熊大デジタルアーカイブ室・竹内裕希子であった。

3. トークイベント語り手を対象とした災害の振り返り効果の検証

3.1 調査概要

災害アーカイブ展のパネル展示ならびにトークイベントを契機とした語り手の振り返りを明らかにすることを目的としてアンケート調査とインタビュー調査を実施した。対象は、7回のトークイベントの語り手11名のうち熊本大学関係者を除く9名である。

アンケート調査は、調査表を郵送またはメールで送付・回収し8件(表2)の回答を得た。調査表送付時に、研究趣旨と回答の取り扱い、記名であることを説明し了解を得た。調査表には、インタビュー調査の実施可否について問う項目を設けており、可能と回答した6名(表3)に対してインタビュー調査を実施した。インタビュー1はAとBの希望により一緒にインタビュー調査を実施した。

インタビュー調査は、「熊本地震の経験について他人と語る頻度」「アーカイブ展が期待通りのイベントであったか」「トークイベント登壇の感想」を軸としながら各人のエピソードを何う半構造化形式で実施した。本稿で使用するインタビュー記録は、インタビュー調査の音声記録から文字起こしを行い、そのスクリプトを語り手に確認いただいたものである。

3.2 パネル展示が災害の振り返りに与えた影響(1)「期待通りだった」理由

アンケート調査の結果、トークイベントの語り手の8名中6人が、災害アーカイブ展は「期待通りだった」と回答した(他2名は「わからない」と無回答)。インタビュー調査結果から「期待」の背景として、開催された災害アーカイブ展の目的が「熊本地震の振り返り」や「次への備え」であることを認識していたことが考えられる。

振り返りでは、「自分が体験したこと以外の熊本地震のことを知る事ができた」「断片的に記憶として残っていたものを全体的なイメージとして再構築できた」とあり、熊本地震の全体像と復旧・復興の過程の把握が自己の振り返りにつな

がったことが「期待通りだった」という回答につながったと考えられる。

熊大デジタルアーカイブ室に対しては、専門家が関わることで他事例を知ることができる、全体を整理することにつながるなど自治体を実施する防災イベントとの「視点のちがいが」「学生の参画」が挙げられた他、「持続性」のある取り組みを期待していた。

(2) 展示内容への要望

展示内容に関するインタビュー調査結果を以下に示す。

展示内容に関しては、例えばもっと細かい、テーマを設けてその展示があったりするといいかもしれない。今回はアーカイブ室の中のこのコンテンツを持ってきて、こんなことをみんなに伝えたいんですよ、という感じ。「全体的に熊本地震です」じゃなくで「熊本地震のここを今回は」というのがあってもいいのかなと思います。間口が広すぎると、重くなると思うんですよ。熊本地震ってやっぱり思い出したくない人もいるはずですね。「今回は熊本地震の中でもここをやるけん」というと熊本地震を思い出したくない人も「そこだったらいける」ということもあるんじゃないかと思います。

下線は筆者による

(230301_TERADA インタビュー1 : B)

地域の方々に入口の映像(発災時の映像)があるってわかって「怖いから行かない」って言われて。僕自身もトラックの振動とかがまだ怖くて、下から振動が来るとやばいかもって思ったりするんですけど、多分そういうのって、皆さん何かしらあるんだろうな。だから、別に強制するものでもないし。ここはそういう場所がありますのでと説明するようにはしてます。この辺(復興過程の展示)、地域の方と話していると、当時の話より自分はどの仮設団地において団地の中のサロンだったり、コミュニティみたいなお話はよく聞く。当時のことを語るよりは、もうちょっと楽しい記憶の方を語る方が気持ちとしても楽だと思いますし、あえてその当時のことを語る必要もない。当事者からするとですね。(中略)去年、学園大のボラ

ンティアの子たちが仮設団地の活動風景を写真展をしたいと言って、(館内入口に)フレームを組んで写真を出して展示をした。そういう復興のあの写真を見るのは割と受け入れられやすい。(展示の時も)地域の方とコミュニケーションをとっていました。

下線は筆者による

(230309_TERADA インタビュー3 : D)

地震発生後から現在に至るまで住民として防災活動に携わる語り手からは「地域自身がお腹いっぱいになってる」ということが語られた。訓練などは「大事」と言う一方で、「また防災」「聞き飽きた」という人も少なくないという。アーカイブ展については「集客が少ない」「広報に工夫が必要ではないか」と多くの人に見てもらいたいと思いが一方で「あの(地震の)映像が流れているのを見ただけで、私はちょっと見たくないという方もいらっしゃるの、地域の方々に配慮すべき部分はある」というように開催への工夫を求める声もあった。また、「矛盾するようだけど地道にやっていかなければならないところでもある」という振り返りや「運動会の競技を楽しむ感じで、その中で防災の知識を感じられる、身につく」ことを企図した「防災運動会」が好評だったことを例に地域住民のニーズ把握と企画の工夫が求められていることが分かった。

3.3 トークイベントが災害の振り返りに与えた影響

(1) 熊本地震のことを語る機会

語り手の熊本地震について語る機会と立場性について確認したところ、年に1回程度から年に10数回程度まで分かれたものの、そのほとんどは「職業人として」語っていた。語る対象は熊本地震の経験者・未経験者、年齢を問わず様々で、語る場所は被災地現場や地域の公民館等の公共施設、または出張で県外でも語る機会があるという人もいた。語る機会の変化については、「最初の頃が多かった」「(今は)減った」と回答が見られた(表4, 図1)。

シンポジウムのなやつも最近減ってきたんですけど

表3 インタビュー調査実施一覧

話し手	実施日	場所	所要時間
A, B	2023年3月1日	熊本市南区	70分
C	2022年3月7日	熊本市南区	70分
D	2022年3月9日	上益城郡益城町	70分
E	2022年3月9日	上益城郡益城町	60分
F	2022年3月10日	上益城郡益城町	60分

表4 熊本地震のことを語る機会と立場
(複数回答可)

頻度	回答数	立場	回答数
A: まったくない	0	A: 話す・語る機会がない	0
B: 年に1回程度	2	B: 一個人の経験として	4
C: 年に数回程度	5	C: 家族の構成員として	0
D: 年に10回以上	1	D: 職業人として	6
		E: その他	1

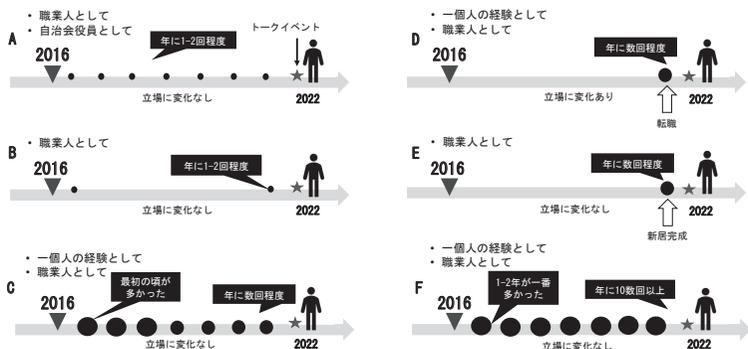


図1 語り手の震災経験を語る頻度と立場

ど、呼ばれることもあるし。元々、学芸員として、文化財の専門職として入庁していることもあるんで。文化財の復旧っていうところでお話してくれっていうこともありますね。地震、断層について話してくれって。布田川断層帯って国天然記念物で、国の文化財の保存と活用をおこなってますので、その説明ということで、現地です視察対応、そういった話をすることもある。地域の歴史を教えてほしいということで、小学校の出勤授業行ったりとかして、地震の話をするっていうことはあります。(中略)対象はもうバラバラですね。視察は議員さんとかもいらっしゃるし、学校の先生もいらっしゃるし、学生さんも当然入ってます。外国の方も何人かいらしゃったこともあるしですね。当然通訳を介してっていう形だったんですけど。

下線は筆者による

(230310_TERADA インタビュー5:F)
私は色々な場面で熊本地震のことをお話させてもらう機会があります。地震直後から熊本大学の文系の学部のイベントにもすぐ呼んでいただいて。私が復興部に異動したのでその関係もあってすぐお話する機会があったり。地震があった年でい

うと東京都の23区の防災課長会議にも呼ばれたり、JICAで海外からの視察の受入れをしたり、地震のあった年からずっと継続してやっています。(中略)よそに行くとか体験されていない方なので。熊本でする時にはどちらかという振り返りをして、あの時どうだったねって話ながら今後、また地震があったら、別の災害があったらどうだとか。

下線は筆者による

(230307_TERADA インタビュー2:C)

インタビュー結果から、語る機会は減少しているが、本来の専門と併せたり、対象によって話す内容の順番を変えたりするなど、これまでの語りの経験を活かしていることが伺えた。

(2) 語り手の立場と内容

アンケート調査項目の「トークイベントで話しにくい・語りにくいと思ったことはありましたか?」という問いに対し、2名が「あった」、6名が「なかった」と回答した。「わからない」は0名であった。

インタビュー調査から、「あった」と回答した人は、特に個人的なことに対する話しにくさや語りにくさが存在しており、「なかった」と回答し

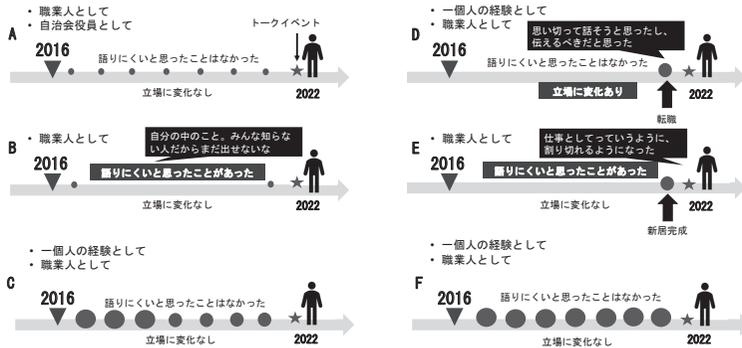


図2 語り手の震災経験の語りにくさ

た人は、語る立場が公務員という職業や消防団員、自治会役員という地域社会での役割に立った「割り切り」の上で語っていることが理由として明らかになった(図2)。

自分の中のこと。みんな知らない人だから、まだ出せないな、というのはいっぱいありますね。それはここの避難所のことでもそうだけど自分の家の中のこと、近所の人たちのことだったり、避難した小学校のことだったり、いろいろあるんですけどね。(中略)自分の内面のことなので、自分で消化する必要があるかなと思う、そういうところがちょっと、まだ語れんなあというところがあるんだけど。(中略)自分に関わる、自分にしか関わらないことは、それはそれでいいかなと思うし、他と関わることであれば、やはりそれが次につながっていかねばならないと思うので、大事なことだと思うので、話すだろうと思いますし、話したような気もします。

下線は筆者による
(230301_TERADA インタビュー1:B)

以上のことから、語り手の立場が、語るができる内容に影響していることがわかった。特に個人的な経験には言葉にする整理がついていない場合や、他者には関係のないことなので語る必要がないと思うことにより、語られにくいことが伺えた。

(3) 発災からの時間の経過

「熊本地震から6年が経過したから話することができる・語るができると感じた話題がありま

したか?」に対する回答は、「A: 6年が経過したから話することができる・語るができると感じた話題があった」が4名、「B: 6年が経過したから話することができる・語るができると感じた話題はなかった」が2名、「C: わからない」が2名であった。

このうち「A: 6年が経過したから話することができる・語るができると感じた話題があった」と回答した人の中には、「当時の状況を冷静に振り返ることができた」「6年の時間が経ち、立場も変わったことから当時のことを思い切って話そうと思ったし、伝えるべきだと思った。」「6年が経過したから話題にできた」ではなく、6年が経過したから自分自身が伝えたい経験やメッセージが整理されてきたように感じます。」という回答や発災時から長く「日常が地震から全然進んでなくて」「大工さんの手伝いとかまでして頑張ってたんです」と振り返る人は、自宅の再建の目処が立ったことと併せて「やっと蓋が取れた」「仕事としてっていうように、割り切れるようになったのかもかもしれない。トークイベントきっかけかもしれないです。本当に久しぶりにあったから、それまで地震が起きてすぐはいろんなインタビューとかがあったけど、久しぶりに振り返ることができたんです。自分の中で。だから、本当にありがたくて、それを踏まえて同じ感じで家が立ち上がっていったので、私にとっては個人的にすごいいいタイミングでした。」と振り返った。

本災害アーカイブ展は、発災から6年の時が経

過し被災地の復旧が進む一方で、記憶の風化が懸念される中、パネル展示とトークイベントを組み合わせて、熊大デジタルアーカイブ室としては初めて開催した。語り手にとって、本災害アーカイブ展は、個人の経験として断片的であった熊本地震の情報について、パネル展示を通じて、他地域の状況を知ったり、災害全体像を把握できたことにより、熊本地震を「改めて振り返る機会」になっていた。今回、インタビュー調査まで協力いただいた方に共通することは、自治体職員（職種は様々）であること、そして「(話す)機会もない」や「発災直後に市民の方にはしてはならない」ことについて、公に当時の自分自身の状況を語り機会が「トークイベントの時から初めてだった」ことや語りができるようになった話題について伺うことができた。

市役所の中でのことを結構話したが、市役所の中のことって市民の人は知らないんですね。当時、振り返ると住民は市役所に対してもっとあんなことやって、こんなことやってというような要求が特に大きかった。市の職員、家のことも顧みず、避難所運営、物資を担当して、休みもなくやっていた。そういうところも知ってもらうのは、すごく大事で、知ってもらうと、今後何かあった時にも、じゃあ、自分たちはこんなことはできるよね。とかいうふうに思ってもらうっていうのは、すごくいいことだと思っています。本当に困っていたこと、こんなことを実はやってほしかった、みたいなのも話せると本当はいいな思っています。もうだいぶ時間が経ったので、今そういう話ができるようになったかな、というふうには思います。

下線は筆者による

(230307_TERADA インタビュー 2)

また、「B：6年が経過したから話すことができる・語ることができると感じた話題はなかった」と回答した人からは、発災後から講演等をする機会があったことで「振り返りと資料のまとめをすることができました」との回答があり、発災から現在に至るまで、語る機会があり、一定の間隔で熊本地震からの振り返りを行ってきた人に

とっては「6年」ということを改めて強調される必要はなかったのかもしれない。

以上のことから、時間の経過とともに語ることが可能な話題、語ることが難しい話題は変化していることが分かる。時間の経過は、語り手の役割の変化をもたらす場合もあるし、環境の変化、心の変化を伴うことがある。災害の経験や記憶の継承の営みに関わる者は、単に発災時のことに注目するのではなく、時間の経過とともに語ることが可能になる語り手の経験があることにも注意を払いながら取り組む必要があるだろう。

4. おわりに

本研究は、発災から7年が経過し、記憶の風化が懸念されている熊本地震の被災地域において被災者が震災のことを語る機会と語りの内容に変化はあったのかを災害アーカイブ展のトークイベントとパネル展示の影響に着目し、考察してきた。

その結果、第一に、3.3(1)に示した通り、災害アーカイブ展が記憶の風化や語る機会が減少傾向にある熊本地方の住民に対して災害経験について振り返り、語る機会を提供していることが明らかになった。第二に、3.3(3)に示した通り、時間の経過とともに語ることが可能になる話題が存在していることが明らかになった。また、本アーカイブ展トークイベントを通じて語り手が語ったのは、発災時のみならず復旧復興の過程も含まれている。すなわち、災害アーカイブ展は新たなアーカイブ資料構築のきっかけになり得ることが明らかになった。また、大学が所有する災害に関する資料や研究成果を地域社会へ持ち出し、災害アーカイブ展を開催することは、資料や研究成果の利活用の方法として一定の価値を認めることができる。第三に災害全体を見渡す視座を提供した。災害アーカイブ展のパネル展示見学、トークイベントにおいて他人の災害経験を聞きながら自らの経験を振り返ることを通じて、語り手たちが改めて熊本地震の全体像または他地域の被災・復興の様子を把握することを可能にしていた。

最後に、地域社会における災害アーカイブ展開催の課題を示す。今回の調査を通して、語り手や

その周囲の住民の中には、未だ災害経験を直視することが難しい人たちがいることも改めて確認できた。熊本県の調査でも熊本地震を経験した児童・生徒の心のケアが今もなお必要であることも指摘されている¹⁴⁾。災害アーカイブ展の開催が地域住民にとって「振り返り」や「防災」の機会となるためにも、被災地域で開催する場合には、テーマ設定や展示内容等について、そこで暮らす住民への配慮と工夫は不可欠である。

謝辞

本研究の災害アーカイブ展振り返り調査については、熊本県上益城郡益城町、熊本市南区、上益城郡御船町で開催したトークイベントの登壇者に並々ならぬご協力を賜りました。また、論文執筆にあたっては、同じ研究室の先輩・王光耀さんにご協力いただきました。ここに感謝の意を表します。なお、本論文の内容はすべて執筆者の個人的な見解であり、執筆者所属の公式見解を示すものではありません。

参考文献

- 1) 気象庁：災害時地震報告 平成28年(2016年)熊本地震, 2016.
- 2) 熊本県危機管理防災課：報道資料 平成28年熊本地震に関する被害状況について, 2024年7月12日.
- 3) 熊本日日新聞：熊本地震最後の仮設団地が入居者ゼロに 益城町の木山仮設, 3月末閉鎖へ発生7年 町長「引き続き住まい再建支援」, 2023年3月26日.
- 4) 熊本日日新聞：熊本地震から14日で6年 「風化感じる」が5割 熊日被災者調査 平成28年熊本地震 熊本地震6年, 2022年4月13日.
- 5) 熊本日日新聞：熊本地震6年＝地震の記憶や教訓, 「忘れがち」6割超 熊本市民アンケート 平成28年熊本地震, 2022年4月15日.
- 6) 熊本県：平成28年熊本地震の発災後4ヶ月以降の復旧・復興の取組に関する検証報告書, 2018年12月.
- 7) 東日本大震災復興構想会議決定：復興構想7原則, 2011年5月10日.
- 8) 日本経済新聞：「震災アーカイブ」閉鎖相次ぐ 災禍の記録どう残す, 2023年3月10日.
- 9) 柴山明寛・北村美和子他：東日本大震災の事例から見えてくる震災アーカイブの現状と課題, デジタルアーカイブ学会誌, Vol. 2, No. 3, 2018.
- 10) 財団法人阪神・淡路大震災記念協会：阪神・淡路大震災10年翔べフェニックス, 2005.
- 11) 佐藤翔輔：科学的エビデンスにもとづいて「災害を語る」意味と効果を考える, デジタルアーカイブ学会誌, Vol. 5, No. 4, 2021.
- 12) 酒井明子・渥美公秀：東日本大震災後の被災者の心理的回復過程－震災後7年間の語りの変化－, 実験心理学研究, Vol. 59, No. 2, 2019.
- 13) 熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター, 部門の研究について, https://cwmd.kumamoto-u.ac.jp/digital_archives_laboratory/research/, 2023年3月28日.
- 14) 熊本県学校安全・安心推進課：【報道資料】平成28年熊本地震に係る児童生徒の心のケア等について, 2023年9月3日.

(投稿受理：2024年5月15日
訂正稿受理：2024年8月30日)

要 旨

熊本地震発災から6年が経過した熊本県では記憶の風化が懸念されている。他方、熊本地震の経験や記憶を継承する取り組みは、各自治体や大学等研究機関で企画・実施されている。この間、被災地域において被災者が震災のことを語る機会と語りの内容に変化はあったのか。本研究は、記憶の継承の手法の一つである語りに着目し、発災から7年が経過し記憶の風化が懸念されている熊本地震の被災地域において、大学が所有する災害に関する資料や研究成果のパネル展示とトークイベントを併せた災害アーカイブ展が被災者に対して語る機会や語りの内容に与えた影響を考察した。その結果、災害アーカイブ展が災害全体を見渡す視座を提供し、災害経験について新たに語る内容を掘り起こす機会を提供していることが明らかになった。